



# 果樹特報

No.5

平成 27 年 5 月 22 日  
J A 中野市営農センター  
J A 中野市りんご・もも部会

梅雨入り前の輪紋病・炭そ病・褐斑病の重要防除です。6 月に入ると高温多湿状態となり、主要病害の感染拡大に最適になります。梅雨明けまでは、連続した降雨・曇天前の予防散布を徹底してください。

5 月の高温・乾燥により、ケムシ類、アブラムシ類、カメムシ類の被害が多い状況です。被害程度により特別散布を実施する等の対策を講じてください。尚、6 月上旬の薬剤散布は下記の内容を参考にして進めてください。

## りんご

### 6 月上旬の薬剤散布 (前回より 15 日後)

◆ 散布日： 月 日

◆ 散布量： リットル

散布時期： 6 月 1 日～7 日

散布薬剤： 水	1 0 0 リットル	
展着剤	1 0 ml	
アントラコール顆粒水和剤	2 0 0 g (45 日前、4 回)	
スプラサイド水和剤	6 6 g (30 日前、2 回)	*注意事項④、⑤参照
スイカル	1 0 0 g (カルシウム剤)	*注意事項⑨参照

対象病害虫：黒星病・黒点病・斑点落葉病・褐斑病・炭疽病

アブラムシ類・シンクイムシ類・ハマキムシ類・カイガラムシ類・カメムシ類

10 アール当り散布量： 600 リットル

#### 【注意事項】 \*必ずお読みください。

- ① 上記の散布時期は目安です。気象条件や各園の病害虫発生状況等を考慮して散布時期を決定してください。尚、不明な点は園芸技術課担当までお問い合わせください。(営農センター TEL 23-3933 まで)
- ② 6 月末まではサビの発生しやすい時期なので高温時の散布は避けること。
- ③ 5 月中旬の散布が遅れた場合や 6 月初旬に曇天が続く予報が出た場合は予定より早めて散布する。
- ④ スプラサイド水和剤は劇物登録薬剤です。購入の際は印鑑をお持ちください。
- ⑤ スプラサイド水和剤に代えて、ダイアジノン水和剤 34 の 1000 倍 (30 日前、4 回、劇物登録薬剤) でもよい。
- ⑥ カメムシ類の発生園は、アルバリン顆粒水溶剤 2000 倍 (前日、3 回) を加用する。
- ⑦ カイガラムシ類の発生園は、アプロードフロアブル 1000 倍 (30 日前、2 回) を加用する。
- ⑧ シンクイムシ類・ハマキムシ類の多い地帯はコンフューザー R (100 本/10a) を 6 月 10 日頃までに設置する。
- ⑨ カルシウム剤は、ビターピット・果実軟化防止や果実からの油上がり予防、果実の日持ち性向上、新梢の徒長抑制などに効果がある。また、スイカルに代えて、ストピットⅡの 500 倍を使用してもよい。ストピットⅡは、カルシウム成分の他に有機皮膜補助剤が混合されており、カルシウム補給と併せて幼果期の果面保護効果がある。尚、使用方法等不明な点は、園芸技術課担当までお問い合わせください。

◆ 次回 (6 月中旬) 薬剤散布予定：6/15～21

引き続き、褐斑病・炭そ病やシンクイムシ類・ハマキムシ類対象の薬剤散布になります。

◆ りんご栽培管理情報は裏面をご覧ください。

◆ 予備摘果の基本要領

- ① つがる・秋映等の側果はサビが発生しやすいので、出来るだけ中心果を残すことが望ましいが、低温被害で中心果が欠落している場合や軸が極端に短い場合は、側果で素質の良い果実を残す。
- ② ふじは側果も利用できるので、肥大・果形を優先して1果そう1果にする。
- ③ ふじは早期に予備摘果を行うことが大玉生産につながり、隔年結果も防げる。（次年度の花芽形成に影響）また、カラマツが多く着果量が不足している場合は、樹勢コントロールのため果形不良果でも着果させる。

◆ 仕上げ摘果で残す果実

- ① 花そう葉が多い果実（光合成が活発となる）
- ② 果梗が長く太い果実（落果しにくい、傷がつきにくい）
- ③ 縦長で肩はっているもの（大玉になる素質ある）
- ④ 果台が1~2 cmの果実（ふじの場合） \*右図参照
- ⑤ 果台枝が15cm以下の果実（ふじの場合） \*右図参照
- ⑥ 着果位置が良好な果実（収穫前の日当たりが良い果実）



◆ りんご5月に目立った病害・生理障害

- ① うどんこ病（葉・果実）



高温乾燥条件下で発生が多いうどんこ病。昨年に続き発生が多い。被害部は、葉や果実が白い粉に覆われるのが特徴。被害葉等を見つけ次第、早めに除去する。放置しておくとなんて年の感染源になるので注意する。尚、越冬病源は発芽（生育）が10日位遅れるので、春先の早い時期に容易に見つけることができる。

- ② 枝腐らん



大敵腐らん病は本年特に発生が早く、被害程度も大きい状況。近年は極細い枝にも発生が目立つ。（左写真）腐らん病は、他の病害と違い、気温が低くても雨等により感染が広がる特異性を持つ。最大の感染期は梅雨であるので、それまでに病斑部の削り取りや抑制処理を進める。

- ③ ふじの果台が異常に長いもの（青玉・光玉除去対策）



今年も多く見られるふじの果台が異常に長いもの。（理想は2 cm以内で止まること）秋季の高温により二次伸長したところに多いのが特徴。尚、この部分に結実した果実は、当初は大玉であるが、後に青玉・光玉になる可能性が高いので、仕上げ摘果までには除去したい。詳しくは6月下旬の講習会で説明します。